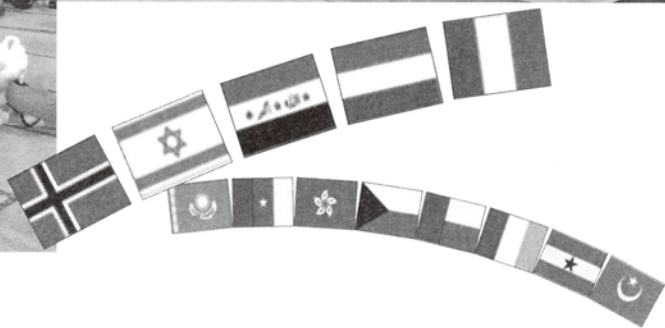




おちほ

第83号 平成27年12月1日 発行 社会福祉法人 椎の木会 落穂寮 発行者 太田 正 則
TEL 0748-77-2299 FAX 0748-77-5588 <http://ochiho.noor.jp/>

第46回 レクリエーション大会



またまた雨…
残念…

今年もレクリエーション大会を開催しました。前日の雨が残り、小雨が降ったり止んだりの当日の朝、それでも職員はグラウンドでの開催を目指してグラウンドの水取りを朝早くから行いました。

けれども、水取りをしても雨が止む気配が見えなかった為、洪々利用者の方々の事を考え、グラウンドでの開催を諦めて、昨年度、お披露目をした多目的学習室で利用者と保護者の方のみの参加でレクリエーション大会の開催になりました。広くきれいな会場が狭く感じる程の人数での開催、さあ内容はどのようなものになったのでしょうか…



いのちのしるし展

理事長 山下陽一

「美術手帳」とそれ以降

「生命の徴(いのちのしるし)」展が滋賀県立近代美術館において開催されました(二〇一五・一〇・三十一～二二)。この展覧会を開催するにあたり、「近美」の学芸員の方が落穂寮で過去に制作された作品について調査に来られ、保存されている作品をご覧になりました。

今から六〇年前の落穂寮の創立当初に取り組まれた創作活動が有力な美術批評家の目にとまりました。一九五五年、これらの作品は月刊の美術専門誌「美術手帳」の臨時増刊号「ちえのおくれた子らの作品」として落穂寮単独で紹介されました。作品とともに落穂寮の生活の様子や制作風景などが紹介されたものでした。

当時制作されたものがすべて残っているわけではないのですが、学芸員の方は「美術手帳」の同時期の作品のみならずそれ以降の作品についても興味を持たれたようでした。今回はその数百点のなかから各時期の代表作品を七点厳選し展示されました。

作品理解の視点

知的障がいを持つている人たちの作品は美術的価値が次第に認識されてき

たようですが、長年その紹介に取り組んできた者として作品の核心部分を伝えることができたのか常に課題を抱えながら行っています。

一九九六年、京都市博物館で開催された「アールブリュット展」は知的障がいを持つ人たちの作品を「生の芸術」として紹介されました。私はこのタイトルは発達障がいを持つ人たちの制作活動の核心を衝いたものと理解しています。発達に障がいを持った人たちの認識は、今の私たちが無限に遠い祖先の人の「認識の仕方」を再現しているのではないかと考えるからです。

特に陶土造形でそれを感じるのですが、丸棒を組み合わせた突起物をくつつけてみたり穴をあけたりする造形は数百万年前の私たち祖先の脳の認識の様子を顕しているのではないかと考えるのです。

発達障がいをもつ人の特性として、過去の体験を積み上げ再構成するのが苦手なことがあげられます。過去の影響を受け難く、経験による加工がない「生(なま)」の姿が顕されているのではないかと思っています。ピカソのように正常な日常生活にあっても、必要に応じて空間認識を解体することができると天才的な芸術家とさえ到達できないような認識世界に住んでいる、と思えるのです。彼らの感性が滲みだした作

品は、いわば二〇〇万年をワープして今その認識と感性を再現しているのではないかとさえ思えます。彼らはそんな感性が基本にあるものだから、今の合理的認識脳を持つ大人にはなかなか納得できないものが多いのです。しかし子どもたちにも接点に近いらしい。

東京世田谷美術館で展覧会を開催したときのことですが、会場の近くにある保育園の子どもたちがドヤドヤとやってきました。その中にダウン症の男の子がいて、私も興味がありますからそれとなく近づいてあれこれ話しかけましたが、びわこ学園の作品の前でしゃがんで見ていました。私は「これは何？」と尋ねると、「いび」との答え。一緒にいた子が「この子はちゃんと言えないの。「へび」と言っているよ。」ということでした。後に出品した担当者に聞くと「へび」だといっていた、ということでした。あのダウン症の子は私たちよりずっと近くで作品に触れることができていたと思うのです。

作品を納得するには

これらの作品を納得する難しさはどこにあるのでしょうか。またその作品に接近する方法はあるのでしょうか。私たちのものを認識したり表現したりする感性は歴史的な経験の影響を色濃く受けて再構成されます。エジプトの壁画では、足は側面、身体は正面、顔は側面を向いて描かれています。当時のエジプト人はそのように人の姿を認識していたのでしょうか。時代を経て

遠近法が発見されたことにより近くのものや遠くにあるものが描き分けられるようになりましたが、現在のコンピュータグラフィックでは三次元の立体表示ができるようになってきました。美術史においては現在急速に研究が進み表現されている内容を深く分析し解釈されるようになりました。美術史の定義づけは難しい問題があるようですが、近代西洋美術史は概観してこの二〇〇年ほどの間に発展してきたといえるのではないのでしょうか。

「とらわれのないまなご」で

障がいを持った人たちの造形作品は二〇〇万年前の感性が今にワープして顕わされたものです。二〇〇年の歴史と二〇〇万年前の脳の認識の痕跡を考えると、はたして近代美術史二〇〇年の知恵の積み重ねで二〇〇万年前の感性を解釈する「物差し」になりうるのだろうか、という疑問です。

それでは彼らの作品の解釈に達することはできないのかということになります。これらの作品を前にして私たちが作品との間にできるだけ余分なものを差し挟まないことが必要ではないかと思っています。アカデミックな美術史による知恵や、市場原理などを差し挟まない、いわば「とらわれのないまなご」で素直に作品に接することができると、これらの表現がもっと身近に納得できるものになっていくのではないのでしょうか。

(二〇一五・一〇・二五)



寮長 太田 正 則

粘土造形活動の歴史

今年の夏は雨が多く、北関東では豪雨となり、鬼怒川の堤防が決壊するという災害が発生しました。自然が猛威を振るうと、人は目の

前の現実になすすべもなく、只々身の安全を図りながら眺めているしかありません。その災害は、近年では想定すらできない状況です。

多くの地域で豪雨や台風被害に遭われた皆様にお見舞い申し上げます。

今に繋がる粘土造形活動

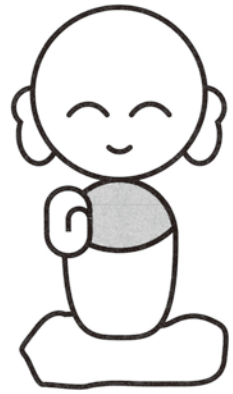
石部に引越してきた落穂寮は、昭和四十八年に中央競馬馬主福祉

しかし、今回は人災とも言われており、その場所の近くに住む人の立場に立ってみると、想定はできなくても想像は出来たのではないのでしょうか。自分以外の人の側に立って物事を考えて言動を行うことが、近年減ってきているように感じます。北関東の豪雨でお亡くなりなられた方々のご冥福をお祈りするとともに、

財団様の助成金を受けて、主に粘土作業を行う作業棟を建設しました。翌年、本来なら児童施設の対象とならない年齢を超過した利用者に対して、新たな作業活動として造形活動に紙粘土が加わり、新しくできた作業棟で紙をちぎって紙粘土を作るところから始めました。そして達磨やお面が作れるようになり、その取り組みから発展し昭和五十三年に漸く粘土を使った造形活動が始まります。最初は粘土に慣れるところから始めたようで、四月二十七日の活動記録には「粘土遊び」と書かれていました。その後、次第に本格的な取り組みとなり、土練りから始めるようになったのですが、評価のところには「表現できる者と、遊びで終わる者に分かれた」とあり、一年を通して少しずつ積み上げていったとしても、本人に興味があれば造形活動として成り立たないことがわかります。こうして元寮長池谷正晴氏により始められた落穂寮の粘土による造形活動は、その後とても個性豊かな、独特の世界を醸し出す作品を作り出し、多くの人に観てもらおうべく、その

作業棟の改築

このように今に繋がる歴史ある活動を支えてきた作業棟ですが、四十二年が経ち改築することになりました。老朽化という理由もありますが、特に、その独特な構造から外気温を遮断することができず、冷暖房が効かない環境なため、近年の猛暑日や真冬での活動がままならず、常時の利用が困難となっていました。そこでこれまでの作品やこれからの作品を展示したり、現在中断している粘土等の造形活動を再開し、自分の感情をうまく表出することが難しい利用者の自己表現の場を提供できればと考えています。また、高齢障がい者の活動の場が少ないという声もあり、地域で生活されている皆さんにも使って頂ければと考えています。来年四月にはお目見えする予定の木造ギャラーリ兼工房(名前はまだありません)、是非見に来てそして使ってください。お待ち致しております。



地蔵盆

納涼祭



地蔵盆



いつも落穂寮を見守ってくださっているお地蔵さま。そのお地蔵さまを洗い清め、お化粧して、みんなでお地蔵さまの前に集合してお祈りしました。

落穂寮で毎年行われる地蔵盆。利用者さん一人一人がお地蔵さまの前に座り手を合わせておられました。

地蔵盆が終わると、そのまま納涼祭です。

今年の納涼祭も、多目的学習室が利用者さんが作った灯笼などで飾り付けられ、会場となりました。

利用者さんは浴衣姿などで、職員が握ったおにぎりや焼きそばでお腹を満たされていました。

その後、グラウンドで盆踊り、思い思いの花火を手に持ち、楽しんでおられ、最後は打ち上げ花火で終了しました。

今年の夏も猛暑でしたが、納涼祭で暑さを避けて涼しさを感じられた利用者さんは、大きく体調を崩されることなく過ごすことができました。



納涼祭



七夕フェスティバル



落穂寮の夏の風物詩である七夕フェスティバルが今年も盛大に行われました。今年度は3人の新人職員による劇をお披露目しました。

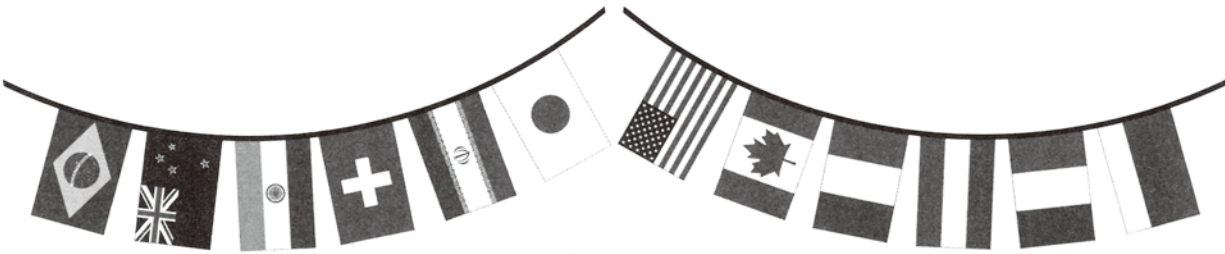
劇のテーマは、昨年Wヒロインブームを加速させたアナと雪の女王♪

物語は、アナ雪をパロディ化させ台本から新人職員で試行錯誤しながら夜な夜な集まり制作していきました。

ハードなスケジュールではありましたが、七夕メンバーで集まり、劇の小道具や装飾品、衣装など一緒に和気あいあいとした雰囲気のなかで手掛けた時間は楽しく思い出です。毎日練習に励み、そんな中時間を見つけて応援に駆けつけてくださる先輩方から程よいプレッシャーを感じ、「何としてでも七夕を成功させるんだ!」という気持ちで一生懸命取り組みました。

劇の見所は、アナのパートナーとなる王子様が秋葉系男子という衝撃的な展開で2人のデートのシーンではピッタリ揃ったダンスを披露し、とても印象に残る場面でした。特別出演では、先輩のK氏が演じる雪だるまの妖精オラフが登場! 貫禄あるオラフの破壊力に多目的学習室は笑いに包まれ、最後は利用者さん、職員一体となって妖怪ウォッチ体操を楽しく踊り催し物は無事幕を下りました。普段あまり見ることのないほど大はしゃぎされる利用者さんの姿や沢山の笑顔を目の当たりにして、一つ大きな仕事をやり遂げることができた! という達成感と喜びで胸一杯に満たされました。





つづき 大会 ヨーリイション 第46回

利用者、保護者、総勢100名程で多目的学習室でのレクリエーション大会開催になり、開会式の後には、男子棟vs女子棟の玉入れ。かごを背負った職員めがけて玉を色別に入れていくもの。逃げ回る職員のかごをめがけてみんなが一生懸命入れていました。次に職員によるダンスの披露。その後、みんなで体を動かして一緒にダンスを踊りました。保護者の方も職員と一緒に踊って頂きました。体を動かしてお腹も減ってきたところでおいしいお弁当の時間となりました。保護者と食べるお弁当は格別で、いつもと違う雰囲気の中で頂くお弁当は特別においしいものでした。

午後からは、やよいちゃん一座による出し物で、歌あり、南京玉すだれ、手遊びありの参加型のもので利用者も一緒に体を動かし、保護者の方もなつかしい歌と一緒に口ずさみつつ、あっという間に時間も過ぎていきました。

今回のレクリエーション大会は小雨になりましたが、来年こそはグラウンドで晴天の中で徒走ができるのかな。よいドン！



飯盒

男子棟

いよいよ今年の夏も恒例行事である、飯盒炊爨が始まりました。あいにくの雨で寮内の多目的学習室にて行われました。残念ながら天候は良くありませんでしたが、いつもとは違った雰囲気での昼食に皆さん「今から何が食べられるのかな？」とわくわくどきどきといった様子でした。

お肉が焼き上がり、目の前に用意されるとあっという間に完食。焼きたてのお肉やソーセージにご飯。大好きなメニューで嬉しかったのか、皆さん箸が止まりません。沢山用意されていたメニューもあっという間に無くなり、お腹いっぱいで大満足の飯盒炊爨になりました。寮内ではありましたが、美味しいご飯を食べて楽しむことが出来ました。来年は良い天気にも恵まれますように。



女子棟

夏の台風の影響もあり、待ちに待った9月18日に女子棟飯盒炊爨を実行しました。寮外に出ての飯盒炊爨は久しぶり。いざ出発となると「え？バスやトラックに乗って私たちはどこまでいくの？」と言わなければなりません。今年には野洲市にある希望ヶ丘文化公園を目指します。

公園内に到着すると、そこには大きな屋根の付いた広場が私たちを迎えてくれました。お昼に向けてポールやバドミントンで遊ぶ人、公園内を散策する人、ベンチに腰掛けてお喋りを楽しむ人、職員は協力して火起しに調理をしたりと、各々でお腹いっぱいになる準備をします。

お肉が焼き上がり、配膳が済んだらお待ちかねの昼食タイム。みんなと一緒に「いただきます！」今日はお肉と野菜たっぷりの



BBQとご飯、焼きそばを用意しました！もちろんおかわりも沢山ありますよ！
野外で食べる特別なご飯は美味しかったようで、準備した食材も1時間程かけて空っぽに。皆さんお腹いっぱい食べた様子。
今日蓄えたエネルギーがあればきっと大丈夫！みんなで来年まで元気に乗り切りましょうね！



〈石部中学校とのふれあい交流会〉

春・秋と石部中学校の一年生がふれあい交流に来てくださいました。

春に比べると秋の交流では、少し気恥ずかしさを感じられているのか、お互いにモジモジと恥ずかしそうにさ



解し合える時間が過ぎました。

中学生さんたちは春から驚くくらい成長されていますが、学生さんの目には利用者さんたちの変化はどう映っていたのでしょうか…

しかし春と違い、缶潰し作業や柿の収穫作業、また活動を一緒に力し合いながら作業をする事で理

ひとり手作りの贈り物をいただき、利用者さんたちも大喜びでした。ありがとうございました。

〈特別支援学校初任者研修交流〉

いろいろな方が交流に来てくださいます。が、福祉現場の職員として、一番刺激を受ける交流ではないかと感じるのが「特別支援学校初任者研修」です。

福祉現場の支援者としての視点とはまた違った形の視点を持っておられ、積極的に質問をされ、私たち職員も学ばせて頂くことが多々あります。



も支援を必要とされる方を対象に毎日支援されているからか、利用者さんたちの懐に入るのがみなさんとても上手で、すぐに打ち解けておられました。

この交流研修を通じて教育と福祉と分野は違うかも知れませんが、今後もお互いに成長し合える交流を続けて行けたらと思います。

利用者さんとの関わりも丁寧で、障がいの度合いなどは違えど

また、来年楽しみにしています！

さよなら六角棟

落穂寮内最

古の建造物であり、作業棟として長年、主に利用者さんの日課活動の場として活躍してくれた六角棟が解体されました。



六角形という特徴的な形で、ある意味落穂寮のシンボリックな存在でもありました。長い間ご苦労さまでした。

来年度には新たな日中活動の場が完成する予定です。工事中は来寮の際、ご迷惑をおかけしますがよろしくお願い致します。

物置き完成！

落穂寮のグラウンドの端に物置きが完成しました。以前からあったものを改修し、屋根も新しくつけていただきました。

利用者さんの保護者の方がボランティアで作って下さいました。作業を見せていただきましたが、やはりプロの技はすごい一言。

日曜大工で素人木工をする身としては、とても勉強になりました。ありがとうございました！

泉

さて、今年度も半分が過ぎました。

一日の流れが以前よりも早く感じるの、このコラムを書いている筆者の人生の残りの持ち時間が少なくなっているからでしょうか。ついこの間の事ですが、以前落穂寮と一緒に働いた、元同僚の数名と食事をする機会がありました。話しはお互いの現状報告から、昔の思い出話など話題は尽きません。昔話をしていると、自然と「今はねえ」といった内容に話は流れていきます。元同僚は当然、辞めた時点での情報しかありませんから、私の話には「ああ、それはよかった」「えー、そんなことになっているんですか」などと反応が返ってきます。そうして話していると、日々の支援の中で、当たり前と思っていることも以前は違っていたんだな、と再認識することが多々ありました。良いことも悪いことも、小さな変化が積み重なって数年後大きな変化になって現れていく。その小さな変化をいかに気付いていけるのかの重要性を改めて感じる機会になりました。

5年後、10年後の利用者さんの姿は、今の支援と確実に繋がっている、そのような意識を持って日々の業務に取り組んでいければと思います。